



作文2部

ぜんこくのうきようきゆうどうくみ あいちゅうおうかいちよつじよう  
全国農業協同組合中央会会長賞

## おじいちゃんから受けついだお米作り

奈良県葛城市立新庄小学校六年

山根智成

「白いご飯が好きなのこの指とくまれ！」ってさけんたら、きつとぼくの手にはたくさんの指が重なり高い高い指のタワーができるでしょう。それはぼく達日本人にとってお米は毎日の食卓に欠かせない主食だから。

ぼくの家でも毎年お米作りをします。でも今年はいつもとちよつと違う。それはいつも側にいて米作りを教えてくださいましたおじいちゃんがいらないから。ぼくのおじいちゃんは今年の一月十日に亡くなりました。おじいちゃんは今まで農業の先ばいとして毎年少しずつお父さんに色々な事を教えてくださいました。田の耕し方、水の管理、肥料の量、土用干し…とノートにはおじいちゃんが教えてくれた事がぎっしり書かれています。お父さんはそのメモを見ながら、

「今年は教えてくれるおじいちゃんがいらないけど、きつとお父さんの米作りを見守ってくれると思うから、おいしいお米を作つて食べさせるからな！」

と、ぼくに言いました。ぼくにはお父さんの背中がいつもより大きく見えました。

そして六月の初め、今年もいつものように緑色の小さな苗の赤ちゃんが田んぼ一杯にきれいに整列して並びました。田植え

が終わわり少しホツとしているお父さん。でも

「米作りはその年の天候に大きく左右される。今年はおじいちゃんがいらないから困つても助けしてくれる人がいてへん。おじいちゃんのおかげがたさを改めて知ったわ。」

と言いました。ぼくが心配しているのを見て

「お父さんは米作りの一年生やる。分からん時はみんなに教えてもらう。智も学校で先生に勉強を教えてもらうのと一緒。お父さんも一つ一つ教えてもらいながら、おじいちゃんに負けへんおいしいお米を作るから智は一杯食べて大きくなれよ。」と言いました。

それから三ヶ月が経ち、小さな苗の赤ちゃんもお父さんの愛情を受け立派な稲へと成長しました。きつともうすぐ黄金の稲穂が重い頭を下げるでしょう。そしたら待ちに待った稲刈りです。

ぼくにとって今年のお米は特別です。一人で頑張つてお米を作つてくれたお父さん。そして、今年もおいしいお米を食べられる感謝の心を教えてくれた大好きなおじいちゃん。それからお父さんにアドバイスしてくれたJAのおじいさん。いつも当たり前前に食べていたお米だけど、ぼくが一粒残さずきれいにいたたく事が、みんなへの感謝の気持ちにつながると思っています。

お父さんが一人で作った今年のお米。炊きたての新米第一号を一番先にぼくがおじいちゃんにお供えしよう。それからぼくは、おじいちゃんに教えてもらった感謝の心を忘れず今日も手を合わせて「いただきます。」そして、「ごちそうさまでした。」